カヲアス+アンソロジー

EPIソード

EPエピソード

今回はカヲアスアンソロジーに参加やご協力いただいたこと、
執筆者さまには素敵なカヲアスを寄稿していただきました。
本当にありがとうございました！
そして、お手に取っていただいた方々にも感謝しています！
大きなジャンルの小さいCPですがこれからも応援していきます。

03	アト
05-09	流星
010	優子
011-014	ポン子２
015-023	あき
024-026	優子
027-030	雛子
031-034	No:10
035-040	草加
041-048	竜神貢
049-054	わたっこ
055-074	稲村衣麻

表紙　：　稲村衣麻
裏表紙：　No:10

カヲアス・アンソロジー
発行日：2019年12月28日
印刷所：くりえい社
サークル
Go-Go-Merry-Go-Round
go_go_merrygoround@yahoo.co.jp

※禁無断転載・DL・オークション

心が深く繋がるほど…

ヤッ

ギュッ…

ビクッ

ビクッ

パシッ

パチュッ

あっ

ギシッ…

学園堕天録…「Fall Down」

アスカ…ッ もう… もたない…

ギシッ

ギシッ

ギシッ

んくっ… あ… あたしも…

イ…ッ

ビュルルルッ

ビュッ

イクッ…!!

きゅっ きゅっ

んあっ

んうっ

はーっ

はーっ

はーっ

失うのが怖くなる

ぎゅっ
アスカ？
どうしたんだい？
満足できなかったかな？
アンタは
この世界は
私を置いて何処かへ行ったりしないわよね？
「世界樹」と呼ばれる次元を支える存在によって保たれている
カヲルは本来その安定を司る存在——

〝使徒〟
あたしは
『世界樹』を通して
〝外〟の世界を視た
そこでは変わらず
他人に壁を作り
自分自身を隠して
生きているあたしと――

全てを受け入れ
その度に自ら
散っていく
カヲル――

キミの中に居る
ボクは例えどれだけ
離れようと

ずっと
側に
居続ける

ボクらの心の中で
いつでも逢えるさ

いつかは
何もかも

…何それ
答えになって
ないわよ…

…バカ。

儚く消えて
しまうとしても
今はどうか側に
いさせて…

心の深くまで
私の存在を
遺せるように

...END

Guto

ヒメゴト

ポン子2

ドキッ
僕には君の心の叫びがわかるよ
嫌い嫌いみんな嫌い！だいっきらい!!
私のこと好き？
本当は孤独がつらいことを
だから私を見て！
独りはイヤ！
あっ
はっ
はあ
はあ
はあはあ

あっ

はぁはぁ

はっ

ぐちゅ

[redacted]

ぐちゅ

ネルフに戻らず
僕とこんなこと
してるって知ったら

みんな
どう思うかな？

…それは

はっ

はぁ

ビクン
ビクン

エヴァに乗れない私は

はあ
ヌプ

…誰も必要としないもの

はっ
ズプ

はあ

ズ
ズ
ズ
ズ

自分が求められる感じがして嬉しいようだ

気持ち良かった？

自分に価値があるんだと思えるからね

レンタルアホな恋 by あき

はー
暑っつい。

日本には
四季があって、
夏の他にも
季節がある
なんてまったく
信じられないわね。

暑いのは
僕も
同じだけど
…

ぷるん

さすがに
その格好は…

なによ…

仕方ない
でしょ。

暑いんだから。

パチン

それに

部屋の中で
いちいち文句
言わないでよね。

はるんっ

はーー
あの噴水、
水浴びとか
出来ないのかしら。

あの噴水

目のやり場に困る

プールも
飽きたし。
……

…ねえ。

見たことないなって思っていたよ。

うん

水着買ったの、これ。

ゆさっ

むちっ

のしっ

それだけ？もっとあるでしょ？

KAWORU SMILE

似合っているよ。

そんなの当たり前でしょ！

どうしたんだい？

もっと…あるでしょ…。

ATフィールド中和

触れてもいいの？

ちゃんと、

見なさいよ…。

退屈していたんだね。

気が付かなくてごめん。

アスカのここ
とろとろで
熱い。

ぐにぐに

そんなの
もういいから

じわぁ…

ねえ…っ

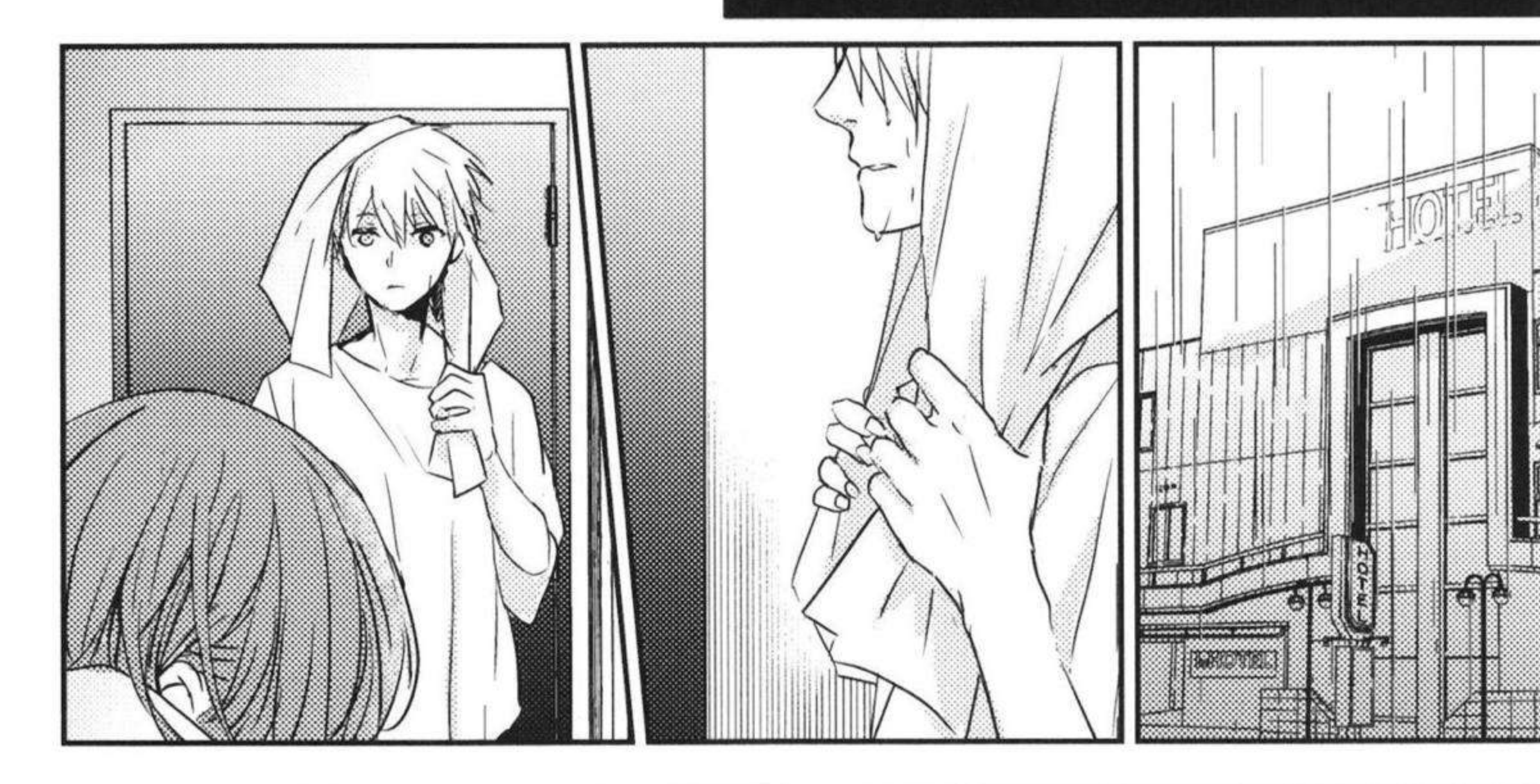
はやくぅ…

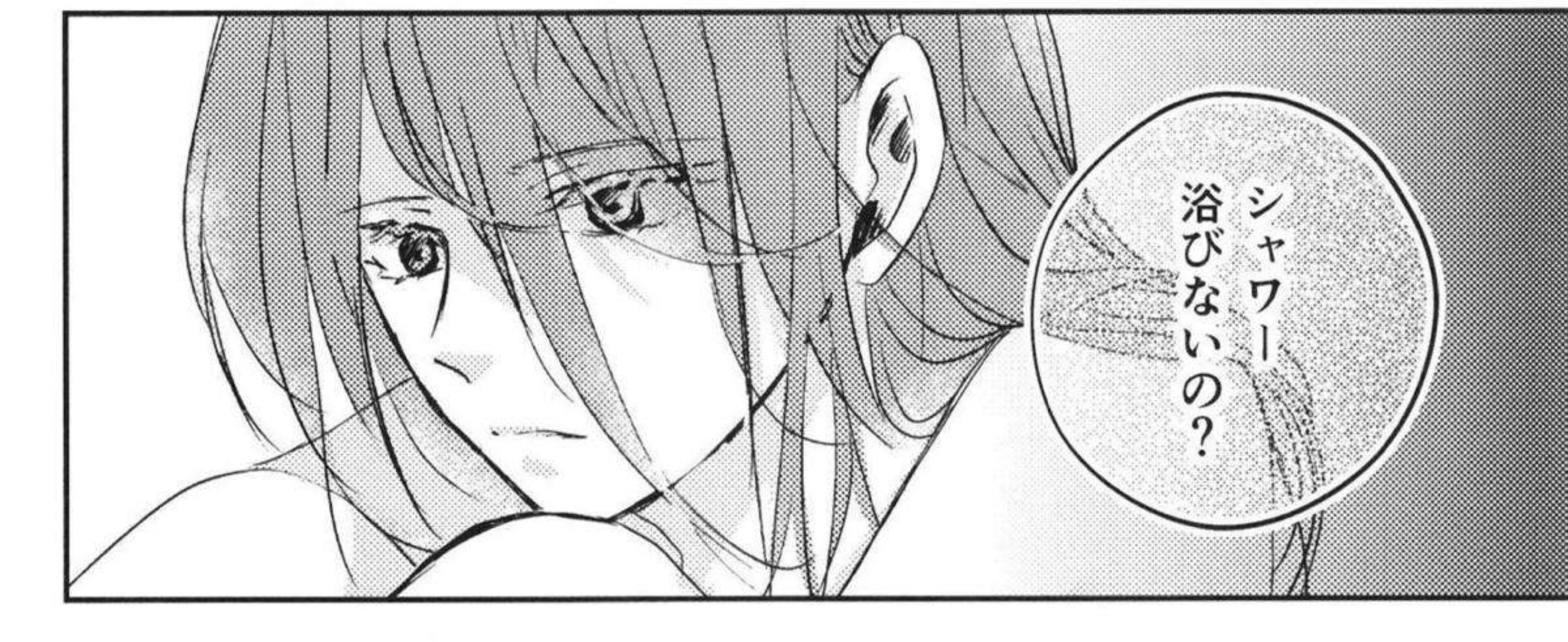
いつも時間をかけてって
いうのにね。
今日は…
ちゅっぐり
今日も、
わがままを言うのかい？
いいの…わがまで…。
…だめなの？
たゆん
ぱぁ♡

ふふっ
いいよ
ちゅん!
ぎゅー
すきっ
すき
はっ
はっ
はっ
あっ
あっ
いいこだね
キモチイッ
あっ
アスカの中
あったかい…
僕にしがみついて
離してくれない
きもちいいっ
ぎゅっ
ぎゅっ
すき
きゅん
きゅん
ぱんっ
ぱちゅ
すく
スキッ
ごめんね
もう…っ
スキ
ぱんっ
あ
すき
ぱんっ
だいすきッ
カコル

融けそうだ…
ドン
ムチュ
ちょっとレロレロ
えへへ

なんて夢…！
ヒィ～
ジワ
ジワ
ばっっっっかみたい!!
終劇


HOTEL
HOTEL
HOTEL


シャワー浴びないの？

もうすぐチェックアウトだから急ぎなよ
頭痛ひどくて頭割れそう…
アンタと寝た後っていつもそう…
最低最悪…

…だから
早く出ようよ
送ってくから

頭痛い…
…雨だから？

…歩きたくない……

おわり

バカ者同士
(現代パロ/アスカモデル設定)
雛子

は、

ぐっ

ちゅっ

ちゅう

あ、

ん、

はあ

はあ

もう、

しつこい！

なんなのよっ！

キーッ

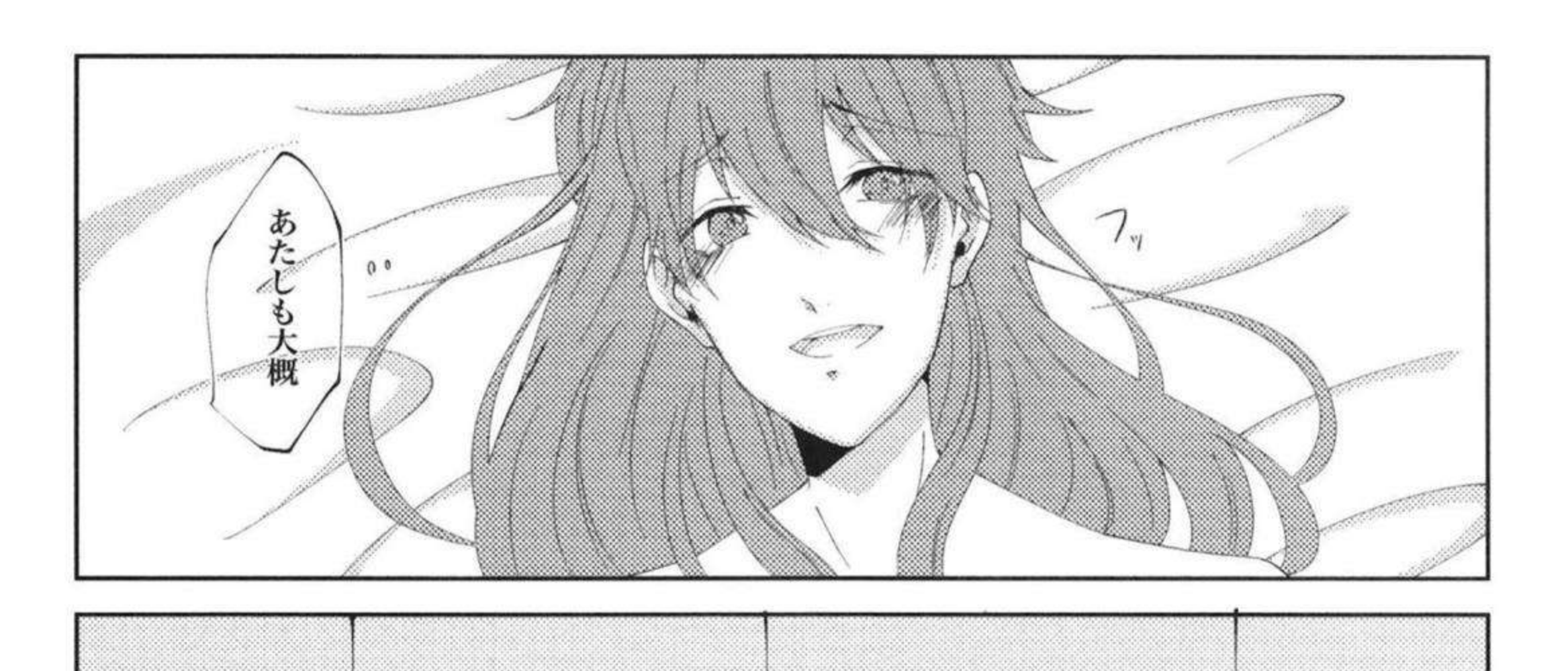
見たよ、雑誌
?
今月の一押しはこちら!
オトナの♥
Asuka Langley
売り切れ続出!
本日再入荷しました
売り切れ御免!
amam
Asuka Langley
大好きな彼を虜にするランジェリー
君は相変わらずキレイだった
nerv
×
n2
コラボランジェリー
でもなんだか面白くない

何でかは、

わからないけど

……

バカね


あたしも大概
フッ

大馬鹿ね

「放課後ここで待ち合わせしない？」

No.10

ザァァァ…

はあ…

なかなか止まないわね

…アスカ

なによ

さっきから乳首見えてるけどワザと？

～～～～～ッ?!

何見てんのよスケベ!!

勝手に見せたアスカの方が変態だろ

なんですってえ!?

もうダメお嫁に行けない……

おおげさだなぁ

…見せなさいよ

は?

あたしだけ見られるなんて不公平だからあんたも見せろって言ってんのよ!

じゃやっぱり痴女じゃないか!

うっさいわねえ!

うわっ

やめ…ッ

くちゅ
くちゅ
すごい…
男子ってこうなってるんだ
ちゅぷ
くちゅ
ぬちゅ
むかっ
アスカだけ触るのも…
不公平だろ！
スッ
くちゅ…
あッ……!?
びくんっ

なにこれ

ガクガクッ

頭がヘンになる……っ

ポタッ

ポタッ

でも

もっと欲しい

あ…

雨止んだみたいだ

人来そうだしもう帰らないと

どうしよう

え

あ

そうね…

あたし身体までおかしくなっちゃったかも

ねえ

明日も天気予報雨なんだけど

放課後ここで…

END

あんな子に
他人と仲良くだなんて
出来るはずがない

この子は
「カヲル」

気持ち悪い

笑いもしない
可愛げが無い

得体が知れない同士
似合いね

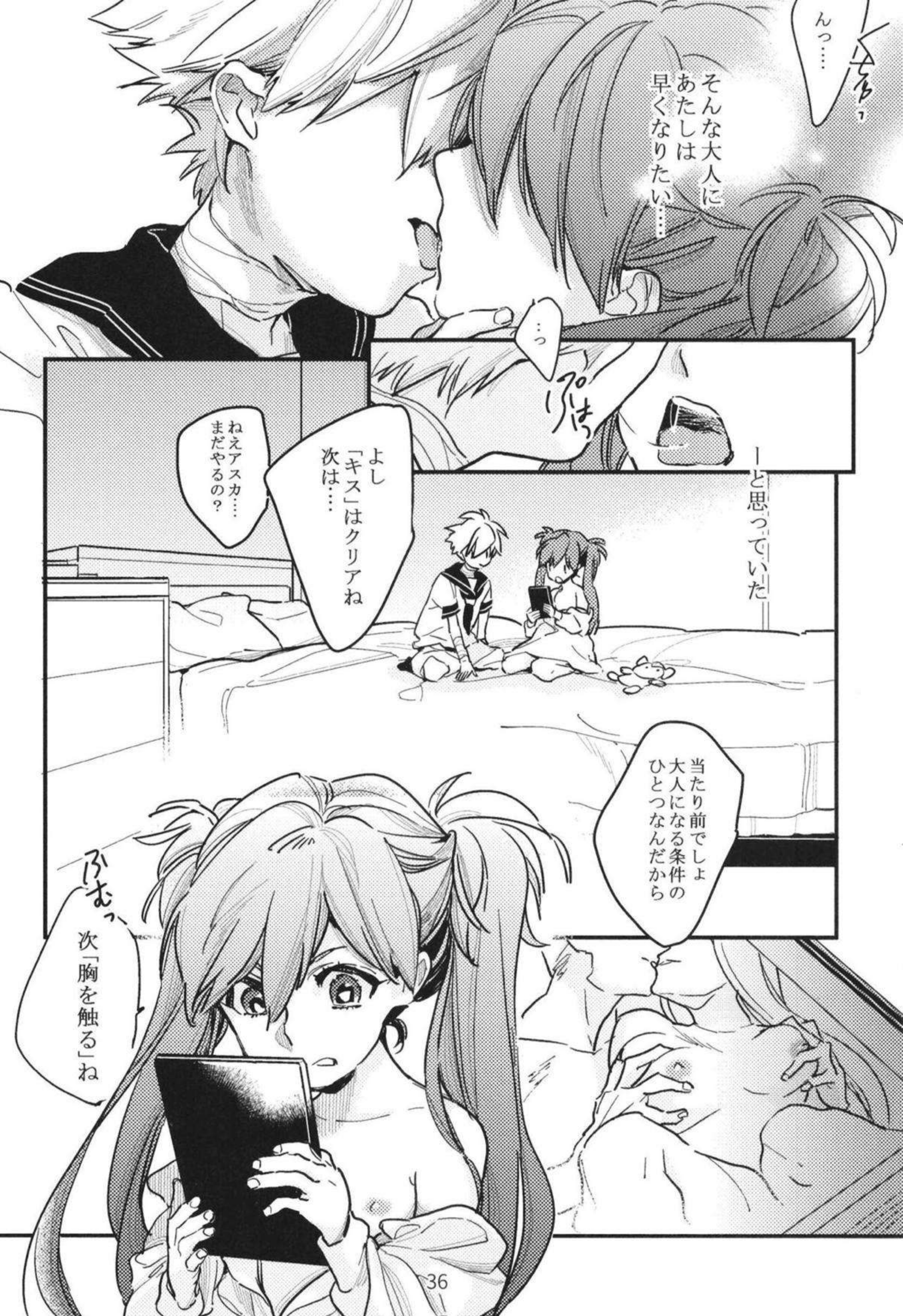
2人とも
仲良くやるんだよ
いいね？

所詮道具

何を考えているのかしら

解ったかい？

ちゃ…


んっ……
そんな大人にあたしは早くなりたい……
…っ
ぷはっ
ーと思っていた
よし「キス」はクリアね次は……
ねえアスカ……まだやるの？
当たり前でしょ大人になる条件のひとつなんだから
ふむっ
次「胸を触る」ね

何でこいつこんな事に付き合ってくれてるのかしら……
?
ちらっ
それにしても……
ぱらっ
ネっ
わかった…
バカなやつ……
ぬ
ぎ
どう？何か感じる？
んー？特に何も……
それなら……
ぺろ

ちょっ
かわいそう
とさっ
やめっ
あっ…
あっ
……次は
どうする？
ぱっ
あっ……
これで
いいかい？
包帯……
服の下も……
ぱっ
さっ
むくっ
あ…んたも
脱ぎなさいよ
バカーっ
私だけなんて
フェアじゃない
わかったよ

アスカ？

もういいわ…
やめる

こんな事
それこそ子供だ

大人なんて
ならなくたって…

私を認めさせるし
子供扱いなんか
させないわ…

ねえ…
アスカ

真似事しても
大人にはなれないよ
君は子供だ

…

カヲルこそ…
なんで
付き合ってんの？

そうだな…

僕も
真似事だ
君達の…

人間の…

君は温かいね……

抱きしめられるなんていつ振りだろう……

あんたは……冷たいわ

愛してるよアスカ

それこそバカね……

嘘を並べられるカヲルは「大人」だった

ピコ中的キセカチ

竜神　貢

ゲーム感覚で戦う新兵器エヴァンゲリオンに搭乗するパイロットとして、国立防衛中学**NERV**に招集された天才ゲーマーと謳われる少年少女達は、その日の放課後もいつものように、ゲームをして過ごしていた。

今日のゲームは、リアル麻雀である。シンジ、アスカ、レイ、カヲルの四人で卓を囲み場を睨む。

「ポン」

「また鳴くの？」

「いいじゃないか、好きなんだよ」

シンジは文句を言うアスカに頬を膨らませてみせた。

「可愛さとか求めてないから。ていうか可愛くないし」

シンジが場に捨てた白を見て、綾波の白い指が閃めいた。

「あ、それロン」

「えっ？綾波？ちょ、ノーマークなんですけど！」

綾波の手がオープンされ、アスカは目を細めた。

「アンタ親よね？跳満だから一万八千じゃない！振り込まなくてよかったわ…」

「あはは、シンジくん、ハコテンじゃないか」

「やられちゃったよ…」

「これでビリは決定ね。ビリのシンジは早くスイカバーを買ってきてちょうだい」

「ごめんなさい。こういうとき、どんな顔をすればいいかわからないの」

「笑えばいいと思うよ…」

シンジの泣きそうな顔での台詞が出たところで、ミサトが部屋に入ってきた。

「みんな、大変よ。敵が現れたわ」

全員の視線がミサトに注がれたところで、シンジが麻雀台をちゃぶ台返しの要領でひっくり返した。

ガッシャーン

「ちょ、なにやってんのよバカシンジ！ひっくり返したところで、アンタの負けは明白なのよ？」

「チッ…」

「なに舌打ちしてんのよ！い^ いから早くスイカバー買ってきなさいよ！」

「わたし、ニンニクラーメンチャーシュー抜き」

「いや、綾波それアイスじゃないよね？」

「ボクはグランドピアノがほしいな」

「カヲルくん、食べ物ですらないけど？」

ピピー！

ミサトが業を煮やして吹いた笛の音が鳴り響いた。

「うるさい、うるさい、うるさーい！」

「アンタの笛が一番うるさいわよ、ミサト」

「大変よ、って入ってきたんだから注目すべきでしょう？…うん！みんな注目してるわね」

「大変って、どうしたんですか、ミサトさん」

ミサトは注目されたことで気を良くして話し始めた。

「そう、大変なの。敵襲よ」

「敵襲ですって？もっと早く言いなさいよ！」

「言おうとしてたわよ？でも注目してくれなかったんだもん」
「注目とか言ってる場合かってーの！それで、敵襲って、やっぱり謎の巨大生命体なの？」
「そう、謎の巨大生命体襲来よ。今回の敵に対抗できるエヴァを準備したから、みんな体育館に来てちょうだい」
そう言うとミサトは上機嫌で体育館へ向かって歩きだした。

エヴァを準備してあると言ってはいるものの、過去の例を考えてもまともなエヴァが完成しているとは思えない、というのがその場のチルドレン全員の思いだった。廊下を進みながら、シンジがおそるおそるミサトに尋ねた。
「それでミサトさん、今回のエヴァの完成度は何パーセントくらいなのかな？」
ミサトは肩越しにシンジを振り返ると口角を上げ、ドヤ顔で告げた。
「百パーセントよ」
チルドレンは顔を見合わせた。回答が予想外で、返す言葉に戸惑うというのが正直なところだ。
「ほ、ほんとに？ついに完成したっていうことなのかな？」
「あはは、エヴァが完成する日がくるなんてね」
「やればできるものね。じゃあ早速プラグスーツに着替えを…」
「ちょっと待って！着替えの必要はないわ」
ミサトはそう言うと体育館の扉を押し開けた。
体育館の中央には、一辺が二メートル四方の立方体が鎮座している。
「あら、早かったわね」
リツコは振り返りもせずに言うと、目は手元の冊子を見続けている。マヤはリツコの持つ冊子が気になるようで、リツコの肩越しに飛び跳ねながら誌面を覗き込んでいた。
「準備できているわよ」
「じゃあ…そうね、今回のパイロットはアスカと渚くんかしら」
「コイツと一緒ー？私、一人でも戦えるわよ？」
アスカはカヲルを指差した。
「協力するって言葉を知らないんだから、足手まといなのよ」
「そんなに言われると、照れるなぁ」
「カ、カヲルくん、誉められてないよ？」
「さ、いいから、乗った乗った！」
「ていうか、ミサト？これ、外に出さなくていいの？むしろ動くの？」
「あ。ほんとね？」
ミサトは笑顔でリツコに説明を求めるようにリツコを振り返った。リツコの背後では、相変わらずマヤがピョンピョンと飛び上がっている。

「まずはそこのモニター映像を見てちょうだい」
ステージ上にいつの間にか設置されていたモニターの前に全員が並ぶと、リツコはモニターの電源を入れた。一番早くにモニター前に体育座りで座っていたレイは、どこからか熱いお茶と煎餅を取り出し、すっかりくつろぎムードだ。
「謎の巨大生命体は現在、三丁目の角の、寂れたゲームセンターにいるわ」
モニターに三丁目の角の寂れゲームセンターが映し出された。巨大生命体がゲームセンターの軒先に首を突っ込み、何かのゲームに夢中になっている様子が伺える。
「謎の巨大生命体をゲームで負かす為に開発されたのが、そこのエヴァよ」
リツコの説明に合わせてミサトがエヴァと呼ばれる立方体の扉を開けた。中にはアーケードゲームの筐体が2つ並んでおり、俗にゲーセン椅子と呼ばれる椅子が2つ並んでいる。
「謎の巨大生命体が興じているゲームは脱衣麻雀よ」
「だ、脱衣⊠」
シンジがあらぬ妄想をして前屈みになったのを見て、ミサトはうなづいた。
「今回、シンジくんをパイロットに指名できないのはその前屈みが理由よ」
「ホント、役に立たないわね、バカシンジ」

「ちゅ、中二の男子として当然じゃないか。なんでカヲルくんは平気なんだい？」
シンジが前屈みのままカヲルの顔を見上げた。カヲルは満面の笑みを見せると決め顔で言った。
「坊やだからさ」
「まって、カヲルくん！それ、エヴァじゃないから！」
「ほんっと、自由なヤツ」
アスカは溜息をつきながら両手を上げた。
「麻雀は得意だし、チャチャッと倒してくるわ」
「そうね、頼むわ。アスカ。モニターで戦いの様子は確認しているわ」
「確認、ってアドバイスくらいしなさいよ」
「アドバイスですって？そんなの無理に決まっているわ」
リツコはわかっていないわね、といった様子で首を横に振った。
「私もマヤも麻雀はしたことがないの。三分前からこの冊子で勉強を始めたばかりよ。それに、観客が下手にアドバイスできぬよう、ゲームの筐体をあの中に入れたの。やっぱり、戦いは正々堂々すべきでしょ？」
「ええっ？世界をかけた戦いで正々堂々とか言ってる場合？…ま、そんなこと言ってもやるっきゃないか。行くわよ、渚」
アスカはプリプリと怒りつつも、気をとりなおしカヲルの姿を探した。しかし、体育館のどこにもカヲルの姿はない。

「さっきまでいたのに、どこいっちゃったんだろう？
カヲルくん…」
「え。まさか逃げたの？」
「バリボリ…はほほ…」
レイが煎餅を頬張ったままの状態でモニターを指差した。モニターを見ると、早くも勝負が始まっていた。カヲルが既にエヴァに乗り込んで戦いを始めていたのだ。
「ふん…なによ、一人でカッコつけようったって、そうはいかないわよ！」
アスカは慌ててエヴァへと向かった。戦局は思わしくない状態のようだが、中に入れば横の席に座ってアドバイスもできるはずだ。
無駄に分厚い扉は三重になっており、ドア一枚づつの間に空間があり一気に入れない仕様だ。電子ロックが解鍵されるのが遅く感じ、アスカは苛立った。
「ドアを三重にしたのは、外からの声によるアドバイスが聞こえるのを防ぐためよ！」
リツコのキリッとした言い切りがアスカの苛立ちを高めるが、リツコは気づいてもいない。するとアスカの苛立ちに気づいたマヤが　小声で囁いた。
「大丈夫　、完全に密室だけど空調だけは考慮しているから仲は快適よ」
バチっと決めたウィンクがまた腹立たしい。ようやくドアが開き一枚目、二枚目、ようやく最後のドアを抜けて、中に入り込んだアスカは、中を見るなり悲鳴を上げた。勿論完全に防音されている為、外にその悲鳴は聞こえていない。
「なっ、なんでアンタ、全裸になっているのよ？」
「あぁ、それはね、負けてしまったからさ」
カヲルは全裸で頭をかいてみせた。
「ま、前くらい隠しなさいよ！ていうか、脱衣麻雀は負けたら一枚ずつ、脱ぐものでしょ？なんで既に全裸なのよ？制服だったんだから、五回くらいは負けられるんじゃないの？」
アスカは右手で視界を遮った。指の間からカヲルが隠していない股間がハッキリ見えるが、指と指の間の空間をこれ以上狭めるつもりもない。
「いやぁ、それがプラグスーツに着替えてここに入ったから、一回の負けでこうなったのさ」
「アンタ、バカァ？なんで脱衣麻雀なのに、不利なプラスーにわざわざ着替えてるのよ？」
「追い詰められた方が真価を発揮するっていうヤツを試したかったんだ。夏休み終了一日前ってやつさ」
アスカはグダグダ言っているカヲルを無視してゲーセン椅子に腰掛けた。ボタンの近くに置いてある百円玉を掴み投入する。すぐさま謎の巨大生命体が勝負を仕掛けてきて、対戦が始まった。
「私たちは服を脱ぐとして、アイツは負けたらどうなるのかしら？あれで服とか着てるのかしら？」
「ははっ、ホントだね」
いつの間にか全裸のカヲルが隣のゲーセン椅子に腰掛

け、ストローで明太子を吸い込んでいる。
「アンタ、ホントにお気楽でいいわね」
「ははは っ、それほどでもないよ」
褒めてないわよ、と思いながらアスカは画面を見つめた。場に捨てられている牌から相手の手を予測する。勝負は一進一退で、アスカは靴下、ブラウス、スカートを脱ぎ捨て、気づけば下着姿になっていた。リツコの作ったシステムが凄いのか、敵の着衣らしき枚数もあと一枚。あと一勝で決まるというところで、敵がリーチなしツモで上がり、アスカは唇を噛んだ。
「コイツ、強いわ」
アスカは唇を噛み締め、両腕を後ろに回すとブラジャーのホックを外した。迷いなく一気にブラジャーを脱ぎ捨てる。ふと、隣のカヲルが静か過ぎるのが気になり横を向くと、カヲルはアスカの胸を凝視していた。反射的に腕で胸を隠した為、画面操作ができず、慌てて片手はボタンに戻した。カヲルの股間はしっかりと反応しており、アスカは今更ながら軽いショックを受けた。ゲーマーとしてゲームの前にいるのに、ありえないできごとだと、脳内が現実を受け入れられずにいた。
「…なに見てるのよ、失礼ね」
「反応しない方が失礼じゃないか」
「そ、そりゃあそうかもしれないけど…」
「持ち時間が減っているよ」
「あ…」
アスカは慌てて捨て牌を選択した。身動きすると胸が隠せなくなってしまう。そして、カヲルの股間から目が離せなくなっている自分に困惑していた。カヲルの脚の間から、それは垂直にそそり立ち、自分の存在をアピールしていた。
「ほら、また…」
不意にカヲルの腕が、捨て牌を選択しようと伸びて、アスカの右胸の乳首に触れた。
「ひゃんっ」
アスカが上げた声に、カヲルは一瞬驚いた顔を見せたが、すぐに捨て牌を選択する操作に戻った。
「勝たないと世界が終わるんじゃないのかい？」
「で、でも、これじゃ動けないもの…どうしろっていうのよ」
「じゃあこうしよう」
カヲルはアスカの真後ろに回り込み、後ろからアスカを抱え込む体勢をとった。右手はボタンに、左手は十字キーに乗せてアスカの肩越しに画面を見つめる。とはいえ、狭いエヴァのコックピットの中。カヲルのそそり立つモノは、アスカの尻の割れ目に押しあたっていた。薄いパンティの生地越しに熱く脈動するものを感じてしまい、アスカは正直もう麻雀どころではなかった。肩越しに画面を見るカヲルの吐息が耳にかかり、身体全体の力が抜けてしまう。
世界とか、もうどうでもいいかもしれない…。もしかしてこれが百パーセントのエヴァの力の影響なの？
一方、カヲルは冷静に捨て牌を選択しているように見

えたが、実は全く冷静さはなかった。アスカのピンク色の乳首を舐め回したい衝動にかられ、慎重に選んでいるように見える捨て牌も、実は適当だった。

適当に選択していることは、アスカにはバレていなかったが、モニター観戦勢には異変が伝わっていた。捨て牌の傾向が突然変わったので当然といえば当然だ。

「さすがアスカだよ！敵も混乱しているみたいだ」

「そうね…今アスカはエヴァの中でパンティ一枚で頑張っているのね！」

ミサトのセリフにあらぬ想像をしたシンジは、また前屈みになってしまったのはお決まりのこととでも言うように、誰の興味も引くことはなかった。

「ボクはこんな前屈みだけれど、カヲルくんはパンティ一枚のアスカを見ても大丈夫なんだろうな…」

「はぁ…はぁ…なんか、ちょっと暑いな」

「空調は快適だってきいてたのに…や、やだっ耳に息かけないでぇ」

「あっ…」

カヲルが捨て牌を選択しようと身動きした際に、先っぽが尻に擦れてアスカは身震いした。カヲルは牌を捨てると、アスカの身体を持ち上げ、クルッと回して自分の上に座らせた。

「え…？なに…？」

「…」

カヲルは黙ったままアスカの左乳房にかぶりついた。左手も十字キーから離し、右の乳房を揉みしだく。

「ヤダ、な、なにすんのよ、ヘンタイ！はなして…ふぁあっ」

カヲルの顔と手を押しのけたいのに、乳首の先を舐められていることでゾクゾクして力が出ない。

「ヤダぁ…渚になんて…ぁぁあっ…なんでこんな感じちゃうのよぉ」

「はっ…嫌がってるのに、感じているのかい…」

「ばかばかぁ…ぁあんんっ先っぽだめぇ」

もう画面を見る余裕はないが、思い出したようにツモった牌を捨てることのみ続けておく。

カヲルは再度アスカを持ち上げると、操作盤の上にアスカの身体を乗せ、パンティを剥ぎ取ろうとした。

「ダメっ…脱いだら負けちゃう…」

カヲルはアスカの言葉に一瞬我を取り戻し、脱がしかけたパンティを戻すと、横にズラしてアスカの秘部を曝けだした。

「ヤダヤダ、見ないでぇ」

アスカの台詞を無視して、カヲルは秘部をじっくり観察した。

「はっ、恥ずかしくて死んじゃいそう…」

羞恥心を感じれば感じるだけ、割れ目からトロミを帯びた蜜汁が溢れてくる。カヲルは蜜汁を舌先で掬いとった。

「やあぁぁあんんっ」

アスカが全身を震わせ、眉を顰めるその表情をいやらしく感じて、カヲルは秘部に顔を埋めた。舌先で割れ目をなぞるように舐め回し、指先で乳首をつまみコロコロと転がしてみる。カヲルの一挙一動にアスカの身体が確実に応えるため、それがカヲルのなにかを満たし、股間のイチモツがかつてないだけ、はちきれそうになっていた。カヲルはゲーム椅子に座りなおすと、自分の上にアスカを、足を開いて座らせた。ズブズブとカヲルのペニスがアスカの中に埋まっていく。

「や、やだっ入っちゃった…」

アスカは涙目でカヲルを見た。

「どうしよう…ぁあああっ…」

「でも、気持ちいいだろ？」

「わ、わかんないっ…もう、わかんないっ」

ぐちゅう…と卑猥な音を立ててアスカの中へと入り込んでいくのは快感の極みだ、とカヲルは思った。普段のアスカからは感じられない弱気だったり涙目だったりが、カヲルに根拠のない自信を与えていた。

「や、やだぁ…はっ、はぁっ…きつぃよぉ」

「動くよ…？」

カヲルはゆっくりと深呼吸に合わせて腰を上下させた。アスカの腰に手をあて、再奥まで一気に入り込まぬよう調整する。

はっ、はっ…

二人の乱れた息遣いだけがしばらくコックピット内に満ちていた。ゆっくり、ゆっくり、乳首を舐めながら腰を動かす。アスカはもう従順に、むしろ自分から腰を動かしていた。本能のままに動くことだけを考えるその頭のどこかで、世界は終わるんだろうなと二人とも感じていたが、この快感の極みの中で終わるのならそれもいいかもしれないとさえ感じていた。

「あ…もう、ガマンできないっ…」

「ふぇ…な、中はダメっっはぁ…」

「世界が…終わるなら、中出しとか関係…ないんじゃないかな…」

「そ、それも、そっか…じゃ、あ、一緒にイッて…よ」

「い、いくよ…」

カヲルは我慢していたものを吐き出すように、激しく腰を突き上げはじめた。カヲルの腕の中で揺さぶられながら、アスカも腰を回して、一番快感を強く感じる場所を探した。

「うあぁっ…イ、イイっ…」

「出すよ…！」

カヲルが大きく深く突き上げ、アスカの再奥で果てたのを感じ、アスカは身体の力が一気に抜けた。こんなに強い快感はどんなゲームでも得られなかった。そっと、寄りかかっていたカヲルの身体から離れる。離れても、まだ火照っている身体が熱い。何も無かったかのように脱ぎ捨てていた服を着る。パンティがベチャベチャで気持ち悪いが、履かないわけにもいかない。世界の破滅までに履き替えるチャンスがあれば履き替えればいい。それだけのこと。アスカはさっきまでのことが信じられない気持ちでカヲルの顔を見た。照れなのか、なんなのかよくわからない感情に支配

されていると感じる。アスカは少し笑顔を作ってみせた。
「…見なよ」
カヲルが画面を指差したので、アスカは振り返って麻雀ゲームの画面を見た。画面上に大きく出ているYOUWINの文字。アスカは目を見張った。
「勝った？なんで？」
「…見なよ。フリテンだ」
「途中から操作しなかったからタイムアップで負けているとばかり思っていたのに」
「奇跡、ってあるんだね」
そのとき、エヴァの三重の扉が開いた。
「やったじゃない、アスカ！」
ミサトが飛び込んできた。未だ全裸のカヲルを見つけて「ヒッ」と小さな叫び声を上げ、カヲルの股間を見つめた。
「いつまで全裸なのよ？早く服着なさいよね！」
アスカはそう言うと、カヲルのプラグスーツを拾って投げつけた。ミサトにカヲルの股間をマジマジと見られるのがなんだか嫌だったのだ。
「ほんと凄いよ、アスカ！予想外の捨て牌で敵を混乱させて自滅を誘うなんてね！」
「当たり前よ？いいからアンタはスイカバー買ってきなさいよ」
「チッ覚えていたか…」
シンジは舌打ちすると、スイカバーを買う為にコックピットから出て行った。アスカはシンジに続いてコックピットから体育館に出た。ミサト、カヲルも続けて出てくる。リツコとマヤは早くも撤収作業に入っていた。
「敵は負けて自爆したわ。ゲームセンターは爆発したけれど、周りの人間は退避させていたから被害はないわ。お手柄だったわね。スイカバーが届くまで、いつもの教室にいたらいいわ。レイももう、向かっているはずよ」
「はい、はいっと」
ついさっきまで世界が終わるかもしれなかったのに、誰しもがいつもどおりなのね。アスカはそう思って少し笑った。教室へ向かう足取りも軽い。背後からする足音はカヲルの足音だ。アスカは勢いよく振り返った。
「一時の気の迷いってヤツなんだから、いい気にならないでよね！」
カヲルが両手を上げて見せると、アスカは満足気に廊下を駆けて行った。金色の髪が窓から射し込む夕陽に煌めいたのを見て、カヲルは呟いた。
「奇跡の価値は、か」
窓から差し込んだ夕陽は、カヲルの銀色の髪をも煌めかせていた。

終劇

Sweet Morning

by わたこ

★貞カヲアスです

★付き合ってる設定です

…かっ、帰る!!!

待って！

…これ見て

……

…ふっ

ぱちーん

〜〜このヘンタイ!!!

しょうがないだろ!? セカンドが可愛いのがいけないんだよ!!

ぜクッ…

……
…そういうことならわかったわ
!!
…うん？
こつん
その…それ
あたしがしてあげてもいいわよ…
お、女に二言はないわよっ!!
え…本当？

…ん、

嬉しいな…
セカンドから
してくれるなんて

何か
変なもので
食べた？

…噛みちぎるわよ

ごめん
なさい

セカンド…
こっち来て

ちゅ…

ん…

ドン

サッ

ちらっ

!?

ちょっ…
何すんのよっ

…それって…

…挿れたくなっちゃった

…これだけじゃ足りなくなった

ハァ

かあああっ

わなわな

あ…
いつ…
ママ？
いやぁぁぁぁ…
ママァ

ねぇ
どうして なのママ？
おやすみ 渚
うん おやすみ
カチャ
そろそろ 寝るか…
ここ
コンッ
こんな時間に 話し声？
おーい！
入るよ
ズッ
寝てんの？

…かないで

いっ

イヤ…

お願い
行かないで

また
あの夢か

んんっ！

ソア…

ちょっと

いきなり何すんのよ

このバカ！

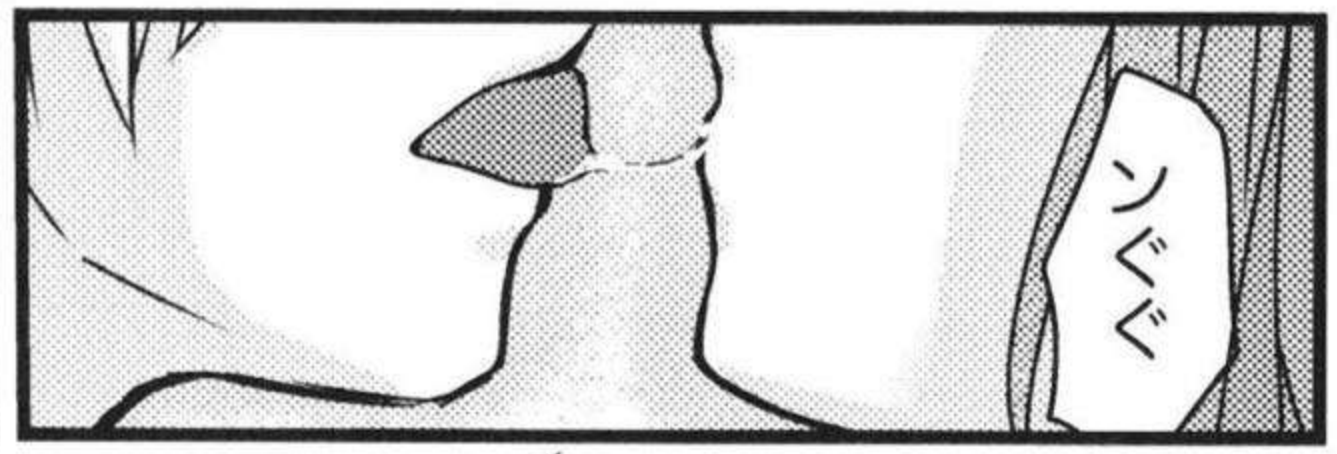
シンジの部屋はあっちだから！

過呼吸かと思ったんだよ

ンな訳ないでしょ！チカンヘンタイ！

まったく油断もすきも

って…
ふぐ…


ソぐぐ

いっ
イタい

なっ

渚
アンタこんなことしてただじゃ

つは

あっ…

はあああ

フッ
殺す…か
別にボクは
それでも
かまわないけどね
ペロッ
ンふぅ
ンあぁ
ふぅ
ン…ン

ハッ

ヤっ

ザクッ

バカバカ!!

ちゃ

やめなさいよ!

キミのここは
そうは
言ってないと
思うよ

ちゅぱ
ちゅぱ
ひっ
はあっ
ふあっ
かあぁ
ふぅ
ちゅぱ
ちゅぱ
ぺろぺろ

はぁう

めちっ

きちち

!!

いっ、やぁ

ぶるる

きゃっ…

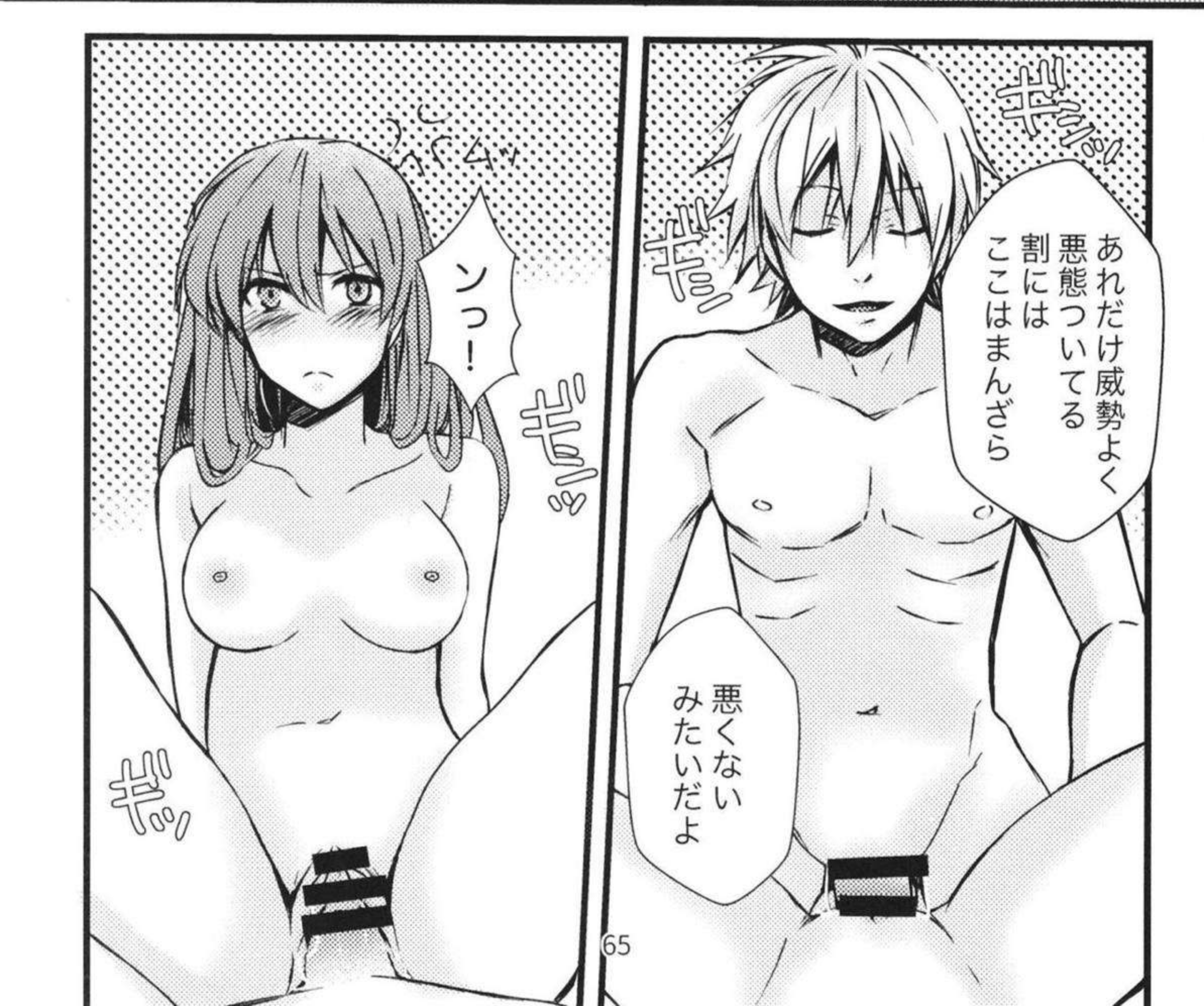
はぅっ

へぇ君でもこんな顔するんだ

ぐぐぐっ

ギシ

ギミッ
ギミッ
ギミッ
ギッ
ぬるっ
おちゅ
おちゅ



うるさいうるさいうるさい!!
カアアア
すく
ちゅ♡
ちゅ♡
あっ♡
あっ♡
あっ
スッ
ムラ

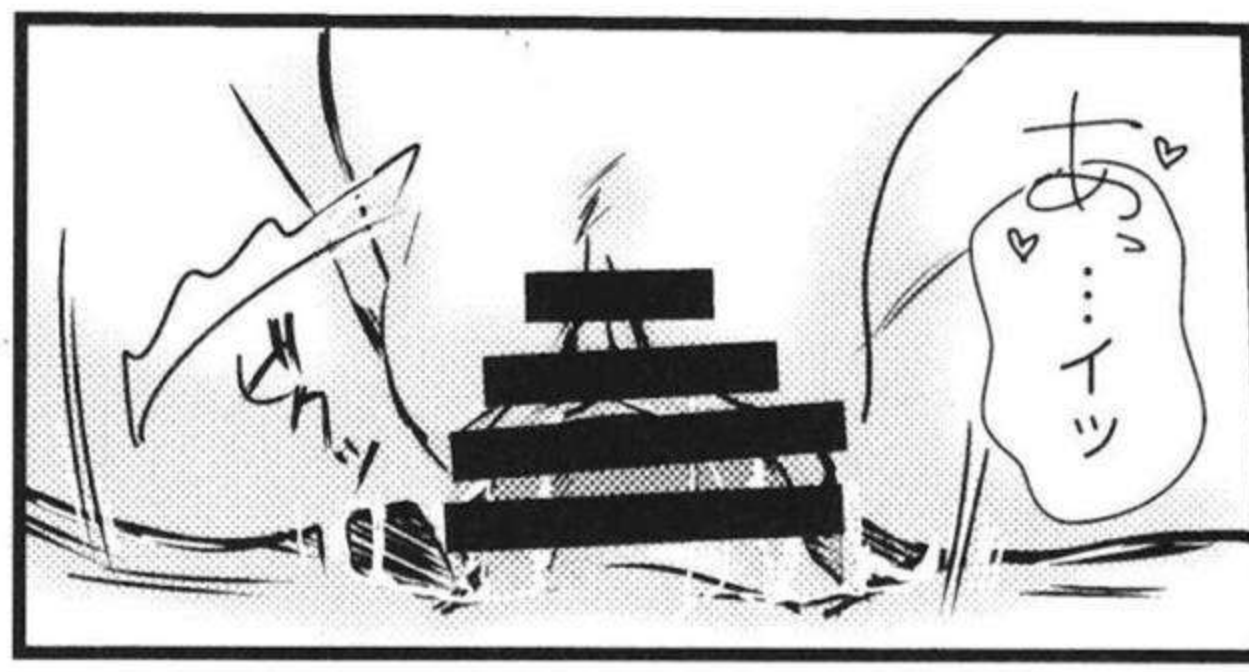
あ…あああああ

アッ…アッアッ

ああああああ

ぎゅ

ぎゅ



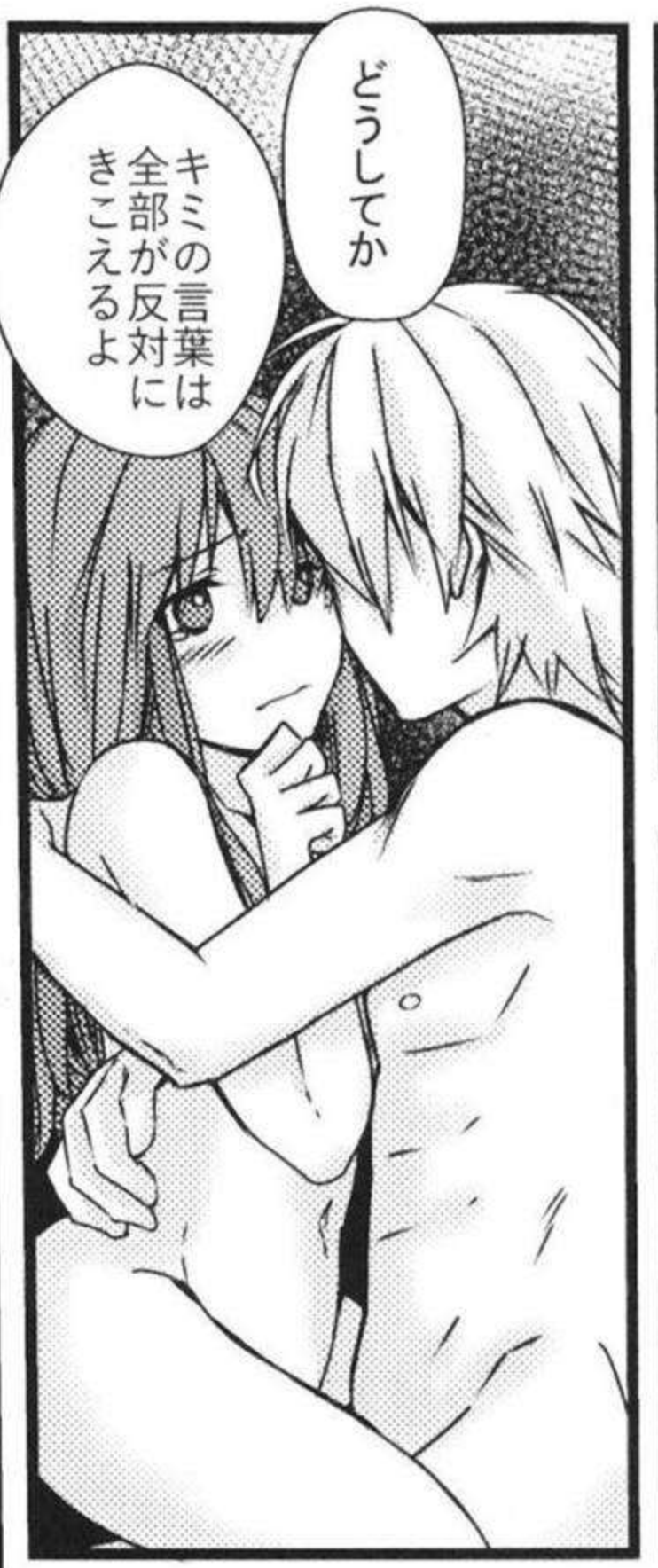
ねぇ…

もっとめちゃくちゃにしてよ

……

思いきり壊して…

嫌な事全部忘れるくらいに壊してよ…



はぁはぁ

はぁはぁ

ズキュ

ズキュ

嫌な事なんて別の方法で忘れる事だって

できるよ…

ズチュ

ズチュ

ズチュ

ズチュ

すごい

奥まで押し込まれて

セカンドバージン

揺さぶられて

頭が
真っ白になる

くちゅ

くちゅ

ぐちゅ

ぐちゅ

ぐちゅ

ぷぷ

真っ白になって
溶けて・・・く

そろそろ
限界だから

あっ♡

あっ♡

・・・激しくするね

じゅぶ♡

じゅちゅ♡

ぷにっ♡
ぷにっ♡
ぷにっ♡

…ん
あっ……
[redacted]
[redacted]
[redacted]

今度こそ良い夢を

おやすみアスカ

END

中表紙　：アト
イラスト：優子

漫画
堕カヲアス　　：流星
庵カヲアス　　：ポン子２
　　あき
現パロカヲアス：雛子
　　：優子
幼カヲアス　　：No:10
　　：草加
貞カヲアス　　：わたっこ
　　：稲村衣麻
小説
ピコ中カヲアス：竜神貢

順不同・敬称略

裏表紙:No:10